

第6回 INAS-FID 室内陸上競技世界選手権大会の状況と国内展望

A study for prospects domestic affairs in the future
from 6th INAS-FID Indoor Athletic World Championships

井上 明浩
Akihiro Inoue

〈要旨〉

2010年第6回INAS-FID室内陸上競技世界選手権大会が世界14カ国から約300人の選手が参加し、北欧スウェーデンのボルナスで開催された。この大会に日本選手団が参加したことは、大会史上初めてのことであり、我が国の知的障害者スポーツ史上に新たな歴史を刻む出来事である。知的障害者スポーツの全国的な展開の幕開けは、1980年の日本スペシャルオリンピック委員会設立であり、その後1994年に日本知的障害者陸上競技連盟(JAAID)が設立され、徐々に発展してきた。しかし今後、さらなる競技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を図ることが必要となろう。障害者スポーツという捉え方より、アダプテッド・スポーツ・アクティビティとして、障害者のみならず幼児、高齢者、女性等々何かしら配慮を必要とする人を対象としたスポーツとして統合的に実践、地域スポーツとして発展していくことを願う。

〈キーワード〉

知的障害者、室内陸上競技、アダプテッドスポーツ

1. はじめに

2010年4月14日から19日の日程で第6回 INAS-FID (The International Federation for sport for athletes with an intellectual disability) 世界室内陸上競技選手権大会がスウェーデンのボルナスで開催された。この大会の参加にあたっては、日本パラリンピック委員会⁽¹⁾(JPC: Japan Paralympic Committee)が窓口となり、日本知的障害者陸上競技連盟(JIDAF: Japan Intellectual Disability Athletics Federation)が選手の選考及び派遣を行った。まず選考にあたっては、JIDAFが現在国際大会派遣対象選手として日本選抜チームを編成しており、その選手の中から今大会参加標準記録を上まわる者を対象として、選手本人並びにその選手の指導者そして保護者に出場の意向を尋ねた。今大会は連盟の都合から、渡航費並びに参加費等その全てを、選手及び役員に全額負担を強いられることから、結局日本選手団は、短距離、長距離にそれぞれ1名ずつ、役員1名の計3名で編成された。今大会は、世界14カ国から約300人の選手が参加。地元の高校生等約100人を超すボランティアに支えられ開催された。筆者は個人的に80年代後半から約20年以上に亘ってボランティアコーチとして知的障害者スポーツに関する活動に携わっている。この間

国際パラリンピック委員会(IPC:International Paralympic Committee)が関与する競技スポーツの国際大会には、1992年マドリードパラリンピック(スペイン:マドリード)を皮切りに、コーチや監督、団長として数多くの国際大会を経験してきた。

今大会で6回を数える室内陸上競技世界選手権大会であるが、もちろん陸上競技本来の屋外競技場で開催される通常の世界選手権大会も過去6回開催されている。これまで日本は、通常の世界選手権大会には過去1999年スペインの



第6回 INAS-FID 世界室内陸上競技選手権大会開会式

セビリアで開催された第2回大会から出場しているが、室内陸上競技選手権大会には今大会が初出場となる。そしてこの度、日本選手団団長として参加の機会を得たので、その状況を報告したい。

一方、パラリンピックは国内外での知名度はかなりあり、その名を聞いたことがない人はいないくらいであろうが、障害者スポーツにおいても、健常者スポーツ同様に各競技別に世界選手権大会が毎年世界中のどこかで盛んに行われている。しかしそれらはパラリンピックに比べると国内ではまだまだその知名度や認識は薄いと言える。ましてや知的障害者の室内陸上競技選手権大会などの情報さえ関係者周辺に終始してしまう状況である。一方、今年6月に開催された日本ID (athletes with an intellectual disability : 知的障害者) 陸上競技選手権大会は今回で15回を数え、高い標準記録が設定されているにもかかわらず、過去最多の200名を超える選手が出場して、競技力の高い見ごたえのある試合が繰り広げられた。JIDAFが設立され今年で11年を迎え、知的障害者スポーツにおける競技性の高い陸上競技が国内に浸透しつつある。今後その活動がどのようににより普及、発展していくか、現時点で展望したい。

2. INAS-FID (The International Federation for sport for athletes with an intellectual disability) アイナスの概観

2-1 国際組織とその理念

今大会の主催者でこれまで知的障害者スポーツ界の国際的競技スポーツをリードしてきたINAS-FIDは、1986年に設立された。INAS-FIDの理念は、ノーマライゼーションの原則がその基礎にある。これは知的障害のある人も社会の一員としてみんな同じ権利・機会・義務をもつということの意味する。彼らは、高齢者や幼児、目や耳が不自由な人、身体に障害のある人がと同様に何らかの支援を必要としているのである。スポーツの場面においても、知的障害のある人は、自分の能力レベルに合わせて、地域・県・国・国際大会に、進んで参加する権利を有している、ということ掲げている。⁽²⁾

設立から約30年近く経過したが、会長や事務局が次々と変わり組織的には安定しているとは言いがたく、現在の事務局は英国内で知的障害者の支援団体として長い歴史を有するMENCAP⁽³⁾に置かれている。MENCAPはマンチェスターから北東に約40kmのウィークフィールドに事務局を構えている。おそらくロンドンパラリンピックを見据えてのことであろうが、シドニーパラリンピック以来、知的障害者はパラリンピックに参加できない状況が続いている。96年アトランタ大会で初めて知的障害者が参加し、98年長

野、00年シドニー大会までの3大会に参加したが、シドニー大会での男子バスケットボール競技で金メダルを獲得したスペインチーム15名中、健常者が11名いたことが発覚し、その後IPCの裁定としてIDクラス(知的障害者部門)選手の選手登録制度の再構築がなされるまで、パラリンピックへの道が閉ざされた。現在、パラリンピックに知的障害者が出場できないため、その代替的の大会としてINAS FIDが主催し4年に一度グローバルゲームを開催している。しかし最近になって、ようやくその問題が解決され、ロンドンパラリンピックからIDクラス競技つまり知的障害者が出場できる競技が復活することとなった。その陰にはMENCAPの果たした役割がかなり多かったことは有るに想像できる。

現在のINAS-FID加盟国

ヨーロッパリジョナル

オーストリア、ベルギー、クロアチア、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、フェロー諸島、フィンランド、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、ハンガリー、アイスランド、イタリア、オランダ、ポーランド、ポルトガル、ロシア、セルビアモンテネグロ、スロバキア、スペイン、スウェーデン、トルコ、ウクライナ

26カ国

アメリカリジョナル

ブラジル、カナダ、コロンビア、ドミニカ、エクワドル、メキシコ、プエルトリコ、ウルグアイ、アメリカ、ベネゼイラ

10カ国

アジア南太平洋リジョナル

オーストラリア、バングラディッシュ、台湾、香港、日本、マカオ、マレーシア、ニュージーランド、シンガポール、韓国

10カ国

アフリカリジョナル

モーリシャス、南アフリカ

2カ国

計48カ国

2-2 スペシャルオリンピックスとの相違点

前号⁽⁴⁾で紹介した知的障害者スポーツの国際的組織にはスペシャルオリンピックスインターナショナル(SOI: Special Olympics Inc)が、1968年に設立され世界170カ国が加盟している。それに比べると加盟国数は1/3にも満たない数である。SOIが設立から約40年以上経過し、現在ではほぼ盤石な組織力を世界的に展開している中で、あえて80年代後半にINAS-FIDが設立されたことは、逆に注目値する。その意味は何であろうか。それはスペシャルオリンピックスが純粋なスポーツとは呼べない部分があるからではないであろうか。SOIの理念は、知的発達障害のある人たちの成長にスポーツが大きなプラスになると信じ、またスポーツを通じて知的発達障害のある人たちと共に活動

することは地域社会にとっても大きなプラスになるとしている。さらにスペシャルオリンピックスは性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考える。つまりSOIにとってスポーツは、知的発達障害のある人々たちの社会参加やその理解のためのあくまで手段であるとも言えるのである。そのため競技会は、すべての参加者が決勝へ進む形式をとっている。日常のトレーニングから示された記録をもとに、ほぼ同レベルの最大8名ないしは8チームの競技者が予選に参加し、そこで出た競技成績でまた同レベルの競技者どうして決勝ラウンドが組まれる。つまりすべての競技者が決勝に進み、8位入賞以上で表彰式に臨むという形式がとられている。よって全員が入賞し表彰を受けるのである。そのような競技会の方法をとるため、SOIでは、世界記録の保管や掲載、発表は一切していない。つまりは、オリンピック形式とはいふものの、一般的なチャンピオンシップスポーツの形態ではない。このことについては、筆者も20年以上スペシャルオリンピックスの活動に携わってきたが、携わった当初違和感を覚えたところである。無論、SOIの理念は素晴らしく、その理念に沿った活動内容自体が素晴らしく共感できたからこそ、現在でもその活動に携わっている。がしかし当時はパラリンピックにはまだ知的障害者が全く参加していなかった時代であり、国内でも同様に全国身体障害者スポーツ大会は実施されて、既に20年が経過していたにも関わらず、知的障害者にとってはそれに匹敵する全国規模の競技会が全くなかったのである。そのため知的障害者スポーツ界における国内チャンピオンや世界チャンピオンが全く存在しておらず、競技スポーツの機会が与えられていなかった。このような状況の中、80年代後半アメリカを中心に発展するSOIに対して、ヨーロッパ諸国が中心となってINAS-FIDが設立し、純粋なチャンピオンシップスポーツを日常的に展開することは、重度の障害のある人も含め、知的障害者スポーツの振興発展につながるとした同組織の理念にも十分に納得できる。

2-3 日本国内での知的障害者スポーツにおける競技スポーツとJIDAF

日本スペシャルオリンピック委員会 (Japan Special Olympics Committee = JSOC) が1980年4月に発足。翌1981年10月第1回日本スペシャルオリンピック全国大会 (神奈川県藤沢市体育センター) が開催された。その後同大会は、日本スペシャルオリンピック東京地区委員会、社団法人東京都精神薄弱者スポーツ協会及び日本精神薄弱者スポーツ振興協議会が共催という形で、精神薄弱者スポーツ全国大会兼スペシャルオリンピック全国大会という並列名称で行われた。そして91年に第7回大会を同様の名称

で大阪で開催し、この大会をもってSO大会は幕を閉じた。その後(社)東京都精神薄弱者スポーツ協会や社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会の後押しがあり、1992年11月21日、22日の2日間、それまで東京で開催した時と同じ場所の駒沢オリンピック公園陸上競技場を中心会場に第1回全国精神薄弱者スポーツ大会ゆうあいピック東京大会が開催された。開会式では大会史上初めて皇太子殿下が臨席し、全国すべての都道府県・政令指定都市から約3000人の選手が参加して、陸上競技、水泳、フライングディスク、卓球、ボウリング、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール合わせて9競技に熱戦が繰り広げられた。その後法令用語の改正に伴い、全国知的障害者スポーツ大会ゆうあいピックに改称され、次第に競技性が高まり、2000年の第9回大会ゆうあいピック岐阜大会まで開催された。その後、ゆうあいピックは2001年から開催された全国障害者スポーツ大会に統合され、発展的に解消した。21世紀の幕開けとともにこれまで国民体育大会の直後に開催されていた全国身体障害者スポーツ大会は、「身体」という文言を外して、ゆうあいピックを統合し、全国障害者スポーツ大会として新たな段階を迎えた。この大会は、厚生省 (当時) 並びに(財)日本障害者スポーツ協会、開催地都道府県の三者が主催する文字通り行政主導の大会である。

一方、民間主導では神奈川県横浜市中区に本部を置くPWLがFMHジャパンチャンピオンシップ大会⁽⁵⁾を1996年から開催していた。PWLとは「PLAY WORK LEARN」の略で、スポーツなど様々な活動を通して障害者の交流拡大、健康アップを進めていた。単なるレクリエーションではなく、日ごろの練習成果と記録を競い合う場をという障害者からの希望にこたえ、この大会を企画した。⁽⁶⁾現在PWLはNPO法人として、主に知的障害者と精神障害者のためのグループホーム経営をしている。第1回大会を迎えた1996年は、3月にスキー、4月にバスケットボール、8月に水泳、9月に陸上競技を開催した。陸上競技は、日本体育大学建志台陸上競技場に全国12都道府県及び政令指定都市から77名の選手が参加して行われた。スペシャルオリンピックスやその流れを汲むゆうあいピックそして現在の全国障害者スポーツ大会は、最大8人で決勝のみが行われている競技運営であるが、この大会は通常の陸上競技大会同様に予選、準決勝、決勝が行われ、日本一つまりチャンピオンが決定される大会であった。この大会が知的障害者スポーツ史上初めての本格的競技スポーツの幕開けとなったと言っても過言ではない。FMHジャパンチャンピオンシップ陸上競技大会は、第3回大会まで継続され、それを引き継いだのが現在のJIDAFである。JIDAFは1999年に設立し、橋本聖子会長 (文部科学副大臣歴任) を擁して、政財界からの支援を集め組織を固めていった。日本知的障害

者スポーツ連盟よりも設立は古く、その組織編成や国際大会への日本代表選手派遣を兼ねた日本選手権大会の開催などその先駆的な取り組みは、他の競技団体の手本ともなった。今年で15回を迎えた日本ID陸上競技選手権大会は、年々各選手の競技力を向上させ、さらにこれまで知的障害者には危険かつ難しいと思われていた投擲競技も普及し、知的障害者ための陸上競技全般の振興発展に大きく貢献している。

3. 第6回INAS-FID室内陸上競技世界選手権大会 概要及び参加状況

過去大会の開催年及び場所

第1回大会	2001年	Espinho	ポルトガル
第2回大会	2003年	Spala	ポーランド
第3回大会	2004年	Butapest	ハンガリー
第4回大会	2006年	Bollnas	スウェーデン
第5回大会	2008年	Tallinn	エストニア

上記大会に続き第6回大会は、2010年4月14日(水)から19日(月)世界の14の国からエントリーのべ人数男子229人、女子122人の選手が参加し、第4回と同じ開催地、スウェーデンのボルナスで開催された。男女別参加国は男子がコスタリカ、エストニア、フランス、イギリス、香港、イラン、オランダ、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、チュニジア、ウクライナ、日本の13カ国、女子はコスタリカ、エストニア、フランス、イギリス、香港、オランダ、ポルトガル、スペイン、スウェーデン、ウクライナの10カ国であった。世界選手権大会とは言うものの、参加国数を見ても決して多いとは言えないであろう。日本は今大会初参加したのであるが、これまで参加していない理由を考えると、健常者の陸上競技の世界でも日本陸上競技連盟主催の室内選手権大会はここ5年以上開催されていない。それにはまず公式試合ができる屋内の陸上競技場が極めて少ない。また本来屋外の競技であるという一般的認識から人気が高い試合であるとは言えないこと等があげられる。知的障害者の陸上競技の世界においても、これまで国内で1度も室内陸上競技大会が開催されたことはない。今回出場した日本選手団はまさに知的障害者スポーツ史上初の出来事であり、初出場にして男子3000mでメダルを獲得したことは、快挙である。

今大会はスウェーデンの首都ストックホルムから北に約250km離れたボルナスで開催された。スウェーデンの国土は約45万km²(日本の約1.2倍)に約930万人の人口であるが、開催地となったボルナスは、人口26,500人の利便性に富み、人々に育まれた文化や豊かな自然に囲まれた住みやすい地方都市である。⁽⁷⁾ この地で開催された理由を考える

と、まずは開催条件をクリアする室内陸上競技場があること、またスウェーデンの障害者スポーツ協会⁽⁸⁾があり、過去2004年に第1回 INAS-FIDグローバル大会、2006年に第4回同大会を開催した実績があるからであろう。

まず、大会会場や輸送に関して述べる。会場は横傾斜のあるバンク型200mトラックがある屋内陸上競技場である。トラック外周部に跳躍ピットや等のピットを配し、周囲は観客席が設けられている。種々案内掲示等英語とイラスト標記で分かりやすく、さらに地元高校生のボランティアの配置も十分であり、小ぢんまりとしていて不便さを感じなかった。



男子1500m決勝 試合風景

次に大会の内容であるが、4月14日(水)に選手団が現地入りし、15日(木)はアクレディテーション⁽⁹⁾並びに練習日、監督会議、16日(金)は開会式その後競技会、17日(土)競技会、18日競技会終了後閉会式、19日(月)は選手団帰国という日程であった。3日間の競技日程の中で、60m、200m、400m、800m、1500m、60mH、競歩(男子3000m女子1500m)、走高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、4×200mR、4×400mR、7種競技の15競技が開催された。何れも出場するためには、参加標準記録が設定されている。日本選手権大会の記録からすると、通常の屋外の競技会と今回のような室内陸上競技会で単純な比較はできないものの、日本選手権大会8位入賞レベルの参加標準記録が設定された。

今大会は、男子400m、3000m競歩、60mH、砲丸投、女子60mH、走幅跳、三段跳の種目に世界新記録が誕生した。冒頭にも述べたが、日本選手団は選手わずか2名団長兼監督1名で編成され、初出場ながら短距離では200m、400mの両種目で準決勝進出を果たし、特に400mではトータル5位であと一人に勝てば夢の決勝進出を果たすところまで迫った。長距離では1500mと3000mに出場したが、3000mで銅メダルを獲得し、日本知的障害者陸上界初の室内陸上競技世界選手権大会でのメダルを獲得するに至った。



男子3000m表彰式一番右が銅メダルを獲得した原田選手

4. INAS-FID加盟日本知的障害者陸上競技連盟 JIDAFの今後

我が国における知的障害者スポーツの全国的な広がりを展開させた組織は、前号で紹介した1980年設立日本スペシャルオリンピック委員会（以下JSOC）である。当時の陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、JSOC並びに全日本手をつなぐ育成会であり、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。これらの組織は、福祉という立場からスポーツを支えるという意味合いが強い。純粋に陸上競技の発展を目的とする団体ではない。1994年に日本知的障害者陸上競技連盟（JAAID）が設立されるまでは、知的障害者のための陸上競技を専門に支える団体はなかったのである。しかしJAAID設立以降、日本ID陸上競技選手権大会並びに日本IDフルマラソン選手権大会の開催、日本選手団選考及び編成、日本選抜選手強化宿実施等の選手育成等々、格段にそのスポーツ環境が整ったと言える。

しかしながら欧州に比べると、日本のそれはまだ遅れていると言わざるを得ないであろう。障害者スポーツの祭典その最高峰のパラリンピックに知的障害者が参加できるようになったのは、その起源である1948年ストックマンデビル大会から数え、約50年経過した1996年のアトランタ大会からであり、日本選手団が参加したのは、2000年のシドニー大会からである。一方、我が国においては、1998年の長野パラリンピックを契機として、障害者スポーツが、一般的な競技スポーツ同様に競技性が強調されるようになってきた。そのような潮流が、まずFIDジャパンチャンピオンシップ競技会を誕生させ、それを土台に現在のJIDAFがある。組織の拡充という面で、JIDAFは我が国の知的障害者のスポーツの牽引的な役割を果たしてきたと言える。しかし今後、国際的に活躍できる選手を継続的に排出していく

ためにはさらなる競技力向上が課題となろう。それには現在のJIDAFの組織では限界がある。根本的な課題として次なるステージは、一般競技団体との統合化であろう。既に国際テニス連盟は、国際車椅子テニス連盟を傘下に抱えている。つまり健全者スポーツと障害者スポーツが統合化されているのである。今のところ陸上競技界ではそのような動きは全くないが、そう遠くない将来にそれが実現することを願う。国内においては、まず日本身体障害者陸上競技連盟と日本知的障害者陸上競技連盟、並びに日本聴覚障害者陸上競技協会、日本盲人マラソン協会が統合し、日本障害者陸上競技連盟を発足させ、その後日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。もしそれが実現されれば、競技会運営役員及びスタッフ、日常練習活動のための指導者不足等、慢性的な人員不足はかなり解決され、知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながることは自明のことであろう。

欧州では、障害者スポーツはすでに特別なものではなくアダプテッドスポーツアクティビティーと呼ばれ、障害者のみならず幼児、高齢者、妊産婦、病虚弱者、また運動が苦手または不得意だと持っている人、肥満を解消したいと思っている人等様々な人を対象としたスポーツとして行われ、地域スポーツとして、あるいは総合型クラブという形態をとり発展している。一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体とも連携し、普及強化、振興発展が普通に行われている。我が国においてもそのような道が着実に浸透していくことを期待したい。

5. まとめ

2010年第6回INAS-FID室内陸上競技世界選手権大会が世界14カ国から約300人の選手が参加し、北欧スウェーデン北部のボルナスで開催された。この室内陸上競技の世界大会に日本選手団が参加したことは、大会史上初めてのことであり、我が国の知的障害者スポーツ史上に新たな歴史を刻む出来事である。加えるに今回の日本選手団は選手2名団長兼監督1名の合計3名は、すべての者がここ石川県金沢市在住であることは、石川県のスポーツ史にも残るに値するものである。初出場ながら短距離では200m、400mの両種目で準決勝進出を果たし、長距離では3000mで銅メダルを獲得、日本知的障害者陸上界初の室内陸上競技世界選手権大会でのメダルを獲得するに至った。

知的障害者スポーツの全国的な展開の幕開けは、1980年の日本スペシャルオリンピック委員会設立である。当時の陸上競技の選手たちは、スペシャルオリンピック全国大会を目指して、日々の練習に励んでいた。それを支える組織としては、JSOC並びに全日本手をつなぐ育成会であ

り、地方においては各都道府県の手をつなぐ育成会であった。しかしこれらの組織は、本来福祉団体であり、純粋に陸上競技の発展を目的とする団体ではない。1994年に日本知的障害者陸上競技連盟（JAAID）が設立されるまでは、知的障害者のための陸上競技を専門に支える団体はなかったのである。JAAID設立以降、日本ID陸上競技選手権大会並びに日本IDフルマラソン選手権大会の開催、日本選手団選考及び編成、日本選抜選手強化合宿実施等の選手育成等々、格段にそのスポーツ環境が整ったと言える。

しかしながら欧州に比べると、日本はまだ遅れていると言わざるを得ないであろう。今後、国際的に活躍できる選手を継続的に排出していくためにはさらなる競技力向上が課題となろう。そのためには一般競技団体との統合化を図ることが必要であろう。つまり日本障害者陸上競技連盟をまず発足させ、その後日本陸上競技連盟の傘下に加盟することが望まれる。これが実現すれば、飛躍的に知的障害者のみならず障害者全体の陸上競技の振興発展につながるであろう。

欧州では、障害者スポーツという捉え方は、過去のものなりつつある。現在はアダプテッド・スポーツ・アクティビティーと呼ばれ、障害者のみならず幼児、高齢者、女性等々何らかの配慮を擁する人を対象としたスポーツとして統合的に実践され、地域スポーツとして発展している。つまり一般スポーツの一つのカテゴリーとして各競技団体とも連携し、振興発展がなされている。我が国においても今後そのようなスポーツ環境の整備がなされることを期待したい。

注及び参考文献

- (1) 日本パラリンピック委員会（JPC：Japan Paralympic Committee）国際パラリンピック委員会（IPC：International Paralympic Committee）に加盟する国内を代表する機関。日本パラリンピック委員会は、財団法人日本障害者スポーツ協会の内部組織として、1999年8月20日厚生省の認可を受け、発足した。
- (2) INAS FID「The INAS Handbook」2010年
- (3) MENCAPは1946年英国内の知恵遅れの子をもつ親の団体

組織を基盤に、学習障害のある人を支援する団体として設立された。世界的に見てもこの取り組みは先駆的である。我が国においては、学習障害の定義は文部科学省が近年ようやくその定義を定めたところである。

- (4) 井上明浩「2009スペシャルオリンピック冬季世界大会の状況と今後の国内展望」金沢星稜大学人間科学研究第3巻第2号2010年
- (5) FMHジャパンチャンピオンシップ大会は、当時の国際精神薄弱者スポーツ協会INAS-FMH（The International Federation for sport for athletes with an Mental Handicap）と協力関係をもちながら、全日本手をつなぐ育成会松友了常務理事とPWL代表箕輪一美氏が中心となり、通常の日本選手権大会と同様な形式をとる知的障害者スポーツにおける国内初の競技会である。
- (6) 「陸上通じて交流楽しむ」神奈川新聞 朝刊 1996年9月7日
- (7) Bollnas 「Welcome to Bollnas In Halsingland!2010」
- (8) スウェーデン障害者スポーツ協会（SUH:Sveskt Utvecklingscetrum for Hadikappidrott）は、スウェーデンのボルナスに事務局を置き、10数名の職員が常駐する。INAS-FIDの中心的な役割を組織的に果たし、知的障害者のためのパラリンピック代替大会となった第1回グローバルゲームを成功させた。また当事務局は、IPC、INAS-FID系の競技会運営を行うが、一方では国内のスペシャルオリンピックの事務局も担当する世界的に見ても珍しい運営形態をとる。
- (9) アクレディションは、当該大会のための選手登録証の発給をいう。障害者スポーツのほぼ全ての競技会においては、クラス分けが現地で最終確認として行われている。知的障害者スポーツにおいては、INAS-FID選手登録カード及びパスポートを用いて本人照合の後、アクレディションカードが発給され、大会期間中競技会場の出入りなどその効力を発する。
- (10) 日本においても前々回世界大会の開催地であった長野は特に盛んであり、日本フロアーホッケー連盟が置かれている。スペシャルオリンピックの活動のみならず小学生の間にも浸透している。また今年度新潟国体の後に開催された全国障害者スポーツ大会では同競技が公開競技として大会有史以来初めて採用された。
- (11) 我が国においてユニファイドスポーツ®の浸透は、障害者と健常者が一緒にスポーツを行うプログラムとして、今後スペシャルオリンピックの活動が盛んになること、そしてさらに知的障害者のスポーツ全体の発展に関わる大きなカギとなりうると思われる。